股旅探偵 上州呪い村

幡大介
ばん・だいすけ

講談社文庫

講談社文庫

股旅探偵　上州呪い村

幡　大介

講談社

|著者| 幡 大介　1968年栃木県生まれ。武蔵野美術大学造形学部卒。テレビ局嘱託職員、CM制作会社などを経て、文筆業に。2008年、『天下御免の信十郎』（二見時代小説文庫）でデビュー。腹の底から笑える、スケールの大きい作風で頭角をあらわす。「大富豪同心」（双葉文庫）、「千両役者捕物帖」（ハルキ時代小説文庫）、「公事師卍屋甲太夫三代目」（幻冬舎時代小説文庫）、「でれすけ忍者」（光文社文庫）などのシリーズがある。講談社文庫では、お江戸が舞台の本格ミステリ『猫間地獄のわらべ歌』で初登場。「このミス」13位、「本ミス」14位と、文庫書下ろし時代小説としては前代未聞のランク入りを果たし、話題となる。

股旅探偵（またたびたんてい） 上州呪い村（じょうしゅうのろいむら）
幡（ばん） 大介（だいすけ）
© Daisuke Ban 2014

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2014年2月14日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話 出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社デジタル製作部
印刷———豊国印刷株式会社
製本———加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277553-3

目次

第一章　密室は掘割を流れた　9
第二章　上州吾妻郡火嘗村　81
第三章　モウリョウ様が来る　139
第四章　娘の目になにが映ったか　204
第五章　篝火は闇に消えた　259
第六章　名状しがたい股旅物のようなもの　322
第七章　名主屋敷に地獄火を見た　390
第八章　初夏の風　452
解説　末國善己　486

講談社文庫

股旅探偵　上州呪い村

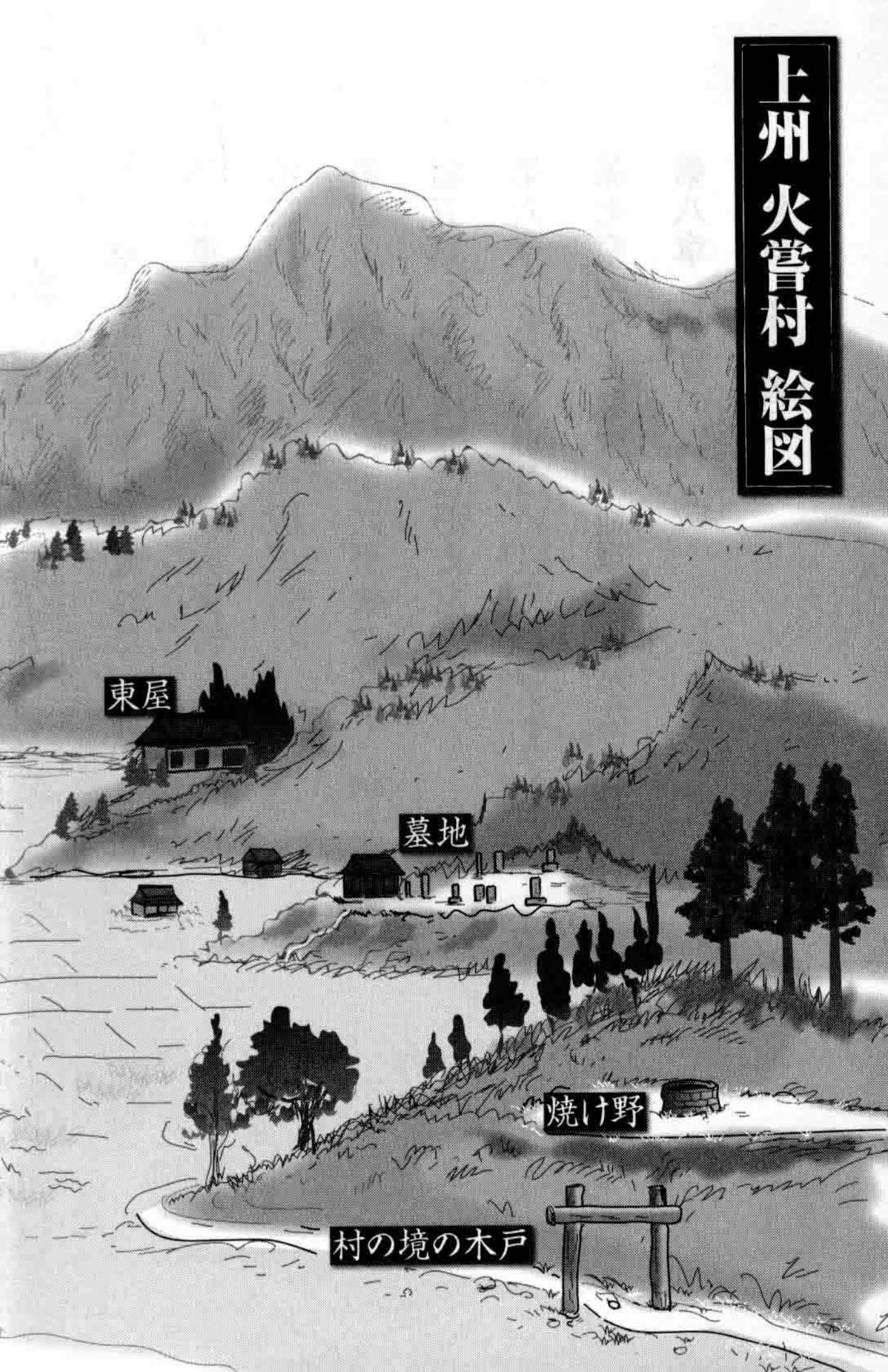
幡　大介

講談社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

第一章　密室は掘割を流れた　9
第二章　上州吾妻郡火嘗村　81
第三章　モウリョウ様が来る　139
第四章　娘の目になにが映ったか　204
第五章　篝火は闇に消えた　259
第六章　名状しがたい股旅物のようなもの　322
第七章　名主屋敷に地獄火を見た　390
第八章　初夏の風　452
解説　末國善己　486


上州 火嘗村 絵図
東屋
墓地
焼け野
村の境の木戸

入らずの山
崖
焼け野
檀那寺
北屋
西屋
赤目ノ滝

『股旅探偵　上州呪い村』――おもな登場人物

三次郎……三度笠の渡世人。
清左衛門……中山道倉賀野宿の旅籠肝入。御蔵開けの日に水死体で見つかる。
大里……幕府役人。清左衛門らの接待を受けていた。
長吉……火嘗村の名主屋敷に仕える小作。
善七郎……長吉の主。倉賀野宿の外れの流れ宿で寝つく重病人。
お初……名主屋敷の長女。御籠り堂に引き籠っている。善七郎の姉。
要……名主屋敷の次女。しっかり者。善七郎の妹。
お末……名主屋敷の三女。天真爛漫。
牟左衛門……名主屋敷の大旦那。三姉妹の祖父。三年前、倅の久右衛門を失った。
玄八郎……火嘗村の乙名庄三郎の倅。屋号は西屋。怪力自慢の乱暴者。
珠之助……要の許嫁。村の乙名の倅。屋号は東屋。青瓢箪。
熊蔵……お末と恋仲の猟師。
お仲……火嘗村の百姓の女房。
弥助……西屋に仕える百姓。玄八郎の取り巻き。
西島……代官所手付。
小向慎之丞……名主屋敷に居候している学者崩れ。上級旗本家の出身。教え魔。

股旅探偵（またたび）

上州呪い村（じょうしゅうのろむら）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

図版作成／幡 大介＋ジェイ・マップ

第一章　密室は掘割を流れた

一

「御蔵開けだぁ！　退いた退いたぁ！」

「荷車が通るぜ！　お上の御用米だ、通りを塞ぐんじゃねぇぞ！」

紺の法被を着けた宿場の若衆たちが大声を張り上げた。ガラガラと車軸を鳴らしながら、米俵を山積みにした荷車が走っていく。前の梶棒には車引きが三人、後ろには車を押す車力が二人がかりで荷車を操っている。街道の旅人は慌てて道の脇に避けた。通りの真ん中を、土埃を上げて、何台も何台も、荷車が走り抜けていった。

上州、倉賀野宿は、中山道と例幣使街道の追分である。宿場の近くを利根川の支流の烏川が流れていて、河岸場（川を行き来する船の湊）を形づくっていた。

倉賀野の河岸は、およそ川船で遡上が可能な限界点に置かれていた。船底の平たい川船といえども、ここから先の上流には、川底がつかえて進むことができない。このような河岸は遡航終点と呼ばれていた。

江戸の運輸力の中心は舟運である。江戸の市中はもちろんのこと、関八州にくまなく、舟運路が張りめぐらされてあった。道路に例えれば利根川や江戸川などの大河が幹線道路で、烏川のような支流は脇道に相当した。

倉賀野の河岸には何十艘もの川舟が繋留されている。舟に大量の物資を載せると船体が沈んで川底につかえてしまう。一艘ごとの積載量が少ない分は、舟の数でまかなわなければならなかった。

渇水期には川に堰を造って水を溜め、舟の運航に支障が出ないようにする。舟運の維持は、河岸で暮らす人々にとっては大変な難事であった。

倉賀野の河岸から川下に運ばれるのは、上州の特産物である絹織物や莨、砥石など。そしてなんといっても、上州と信州で採れた年貢米であった。

江戸は百万の人口を抱えている。一人が一日に五合食すると計算して、一年（当時の一年は三百五十四日。閏年は三百八十四日）でおよそ一千八百万石の米が消費され

る。

江戸の浅草河岸には巨大な米蔵が建ち並んでおり、膨大な米が備蓄されていたが、それでも一年分の米のすべてを貯えておけるものではない。そこで幕府は、直轄領のあちこちに米蔵を建てて、代官所に管理をさせていた。浅草御蔵の備蓄が尽きると、米の回漕を命じて、江戸に運ばせるのであった。

今日はその蔵開けの日であるらしい。宿場の周囲に建てられていた米蔵の扉が開かれて、米俵が運び出されていた。宿で働く車引きや人足だけではとても足りない。近在の百姓たちが助郷（百姓に街道の仕事を命じる制度。年貢の減免などの恩典がある）として駆り出されていた。

宿場中が人足と、助郷の百姓たちとでごった返している。上州は赤城颪の空っ風で知られた土地柄だ。乾いた風は容赦なく土埃を巻き上げる。目も開けられぬ有り様だ。宿場のすべてが灰色に染まっていたのであった。

＊

土埃が濛々と煙る中を一人の渡世人が歩いてくる。ところどころが破れた三度笠を顔の前に傾け、古びて縞の模様も定かではない合羽を背負っていた。藍色の着物は尻端折りして、下肢には旅塵で汚れたパッチ（股引き）を穿いている。手には手甲。脛

には脚絆。足袋と草鞋で足元を固めていた。
腰には長脇差を一本、差している。拵えも粗末で、鐔には赤錆が浮いていた。鞘も塗りが剝げて、木肌の地が露わになっていた。
武士ならぬ身分の者たちは帯刀を許されないが、旅の間だけは、護身用に脇差を帯びることが許されている。道中差ともいう。
脇差という名目ながら、その鞘長（刃渡り）は二尺にも及ぶ。武士の長刀と比較しても遜色がない。どう見ても脇差ではないわけだが、それを〝長脇差〟と呼んで誤魔化している。
男は痩身で背が高く、引き締まった体軀をしていた。長い下肢を足早に運んで、街道の人波を分けながら歩んできた。
吹きつけてくる風は前に倒した笠で避ける。ごった返す人足たちには目もくれず、それでいてぶつかることもなく、宿場を行きすぎようとした。
その時、ふと、渡世人の足が止まった。破れ笠の縁を摘んで、わずかに上に持ち上げた。
渡世人の顔が地面の照り返しに晒される。三十ばかりで痩せぎすの、目つきの鋭い男であった。笠の緒を結んだ右の頬には大きな古傷があった。刀で斬りつけられた時

だけにできる、真っ直ぐで深い傷跡であった。
「馬鹿野郎ッ、手前ぇ、何をボンヤリしていやがった！」
褌一枚の裸体に法被だけを羽織った男が、大きな拳骨で十二、三歳ほどの少年を思いきり殴りつけた。その姿と荒々しい物腰から察するに船頭であろう。少年は斜めに吹っ飛んで地面に転がった。
「ちゃんと碇を下ろしとけって、言ったじゃねぇか！」
少年は地べたに転がったまま、殴られた頬を押さえ、涙混じりの目を向けた。
「オ、オイラ、ちゃんと、親方に言われた通りに碇を下ろしといただ……」
「じゃあ、どうして舟が流されてるんだよ！」
船頭はさらに足蹴を食らわせた。
「野郎ッ、仕事を怠けていただけならまだしも、嘘までついて誤魔化そうってのか！」
「本当だよ！　碇を沈めて、縄は舳先に縛りつけておいたんだ」
「素直に謝れば許してやろうと思っていたのに、この野郎！　拾ってもらった恩義も忘れ、この俺を騙くらかそうってんだな！」
船頭は、さらに二度三度と蹴りを入れた。少年は声変わり前の甲高い悲鳴を上げた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com